

---

# Crimson Defender

柳沢紀雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C r i m s o n   D e f e n d e r

### 【Nコード】

N 1 6 0 3 R

### 【作者名】

柳沢紀雪

### 【あらすじ】

JS事件後、更正プログラムの一環としてアギトは無限書庫に研修に来ていた。その書庫で静かに働くユーノを見て、アギトは何を思っているのか。（ユーノスレに投稿したものです）

守るということはどういう事か。烈火の剣精はただ一人孤独に守り続ける彼を見上げ、そんな思いに駆られた。

「うん？ どうしたの？」

遙か彼方に続くシャフトの中。重力のない空間に浮かびながら彼は、無限とも思える本を背景にして、不思議そうに自身を見上げる小さな少女、アギトにゆつくりと微笑んだ。

「……別に……本の検索なんて退屈だろうなって思ったただけだ」

アギトはまるで女性のような表情で笑う彼に見つめられ、照れたようにそっぽを向いた。

視線を外した先、そこにも本があり、ここでは視界に本が映らない時はない。

それでも、先ほどは確かにアギトはそんな無限書庫の中にあつたにもかかわらず、その視界に彼、無限書庫の司書長であるユーノ・スクライアしか映っていなかったことに思い当たる。

「うーん、確かに面白いつて思えるようなものじゃないのは確かだね」

「はは……」と少し困ったように苦笑する彼の表情が、脇に目をやるアギトには確かに想像でき、そしてゆつくりと視線を戻した先には、確かにそのような表情で宙に浮く彼が居た。

無限書庫は人がいるには広すぎる。

彼は一人ではない。多くの部下に支えられ、理解のある上司も居て、助けられる幼馴染み達も居る。

厚生プログラムの一環として短い間で司書達の手伝いのような事をしながら、アギトは確かにそれを知っていた。

しかし、無限書庫は広すぎる。

人がどれほど集まり、群れをつくり、絆で結ばれあっていたとしても、無限とも言えるこの空間そのものがそれを希薄にしてしまうようにアギトには思えてならなかった。

ユーノ・スクライアは孤独である。無限書庫の司書というものが孤独である。

彼らは無限ともいえる情報の海に対して、虫けらのような身体を奮い立たせ、孤立無援の戦いを挑んでいる。

一人は嫌いだ。と、アギトは声に出さず呟いた。なぜなら、あの時を思い出すから。

多くの人に囲まれ、苦痛しなかったあの時。ただのモノのように扱われ、すべてに絶望していたあの時を思い起こされるから。

『どうしてお前は、一人なのにそんな風に笑えるのか』

そんなことを彼に聞いたこともあった。しかし、彼は少し驚いた様子で、

『そんなの、僕が一人じゃないからだよ』

と答えた。それでは答えになっていないと機嫌を悪くしたことも

今では思い出の一つだ。

今日が無限書庫で過ごす最後の日となる。

もうしばらくすれば、定時を告げる音が鳴り響くだろう。それが聞こえれば、残業が与えられないアギトには最後の鐘となる。

(結局、分ならずじまいだったな)

黙ってしまったアギトに少し未練を残しながらも、仕事に戻り、また相も変わらず膨大な数の本達を周囲に従えながらユーノ・スクライアは孤独な世界に戻る。

あるいは、自分が彼のような魔法が使えないからかもしれないとアギトは思った。

彼のような魔法が使えれば、とすれば彼の心持ちを理解できるようになるのかもしれないとアギトは思った。

定時の鐘が鳴り響いた。アギトに終わりの時を告げる調べが、広大な無限書庫に低く響き渡った。

「うん、それじゃあ、アギト。短い間だったけど、お勤めご苦労様でした」

ユーノは一面に広がっていた書物をすべて閉じ、そして改めてアギトに向き直った。

「ああ、あんまり役には立てなかったけど、面白かったぜ」

ユーノは空中であぐらをかくアギトに大きな手を伸ばし、そして

小指をちよこんと差し出した。

アギトはニヤツと笑ってその指をつかみ、小さく上下に振った。大きさを違う二人の、それなりに思いついた握手の仕方だった。

無限書庫は広すぎる。

こうして、ことあるごとに誰かの手をつかんでいなければ、その空間に飲み込まれていくように思え、そしてこうして触れあうことが何よりも強い安心をもたらすものだった。

「それじゃあ、また機会があったら、今度は友達として一緒にご飯でも食べよう」

「ああ、そうだな。まあ、そのときはロード（シグナム）と一緒にだろうけどよ。楽しみにしとく」

アギトは「へへっ」と鼻をこすり、いつまでも去りがたいここから、えいやつと言って背を向け、既になじみとなった書庫の転送装置へと飛び立った。

思えばそう。彼は姿は誰かと重なるように思えた。

その後ろ姿を見る度に、アギトは誰かを思い出すようだった。それは悲しい背中、そして愛しいと思える背中だった。

流れる風景を眺めながら、アギトはふと後ろに目をやった。

そこには既に魔法陣を足下に置きながら手を広げ、再び本達を踊らせる彼の姿が見える。

彼の表情は何えない。目を閉じているのかもしれないとアギトは思う。

そして、アギトは「ああ……そっか」と呟いた。

彼の後ろ姿に重なる、彼の姿。その幻が振り向き、そして消えていく。

(幻でも、もう一度あえて嬉しかったよ、ダンナ……)

そしてアギトは最後に一際大きく、赤く輝きを放ち、せめてこの薄暗い空間に一握の光あれと祈りを送り、書庫から姿を消した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1603r/>

---

Crimson Defender

2011年10月5日06時25分発行